

四元康祐 作品抄

会計 (Accounting)

まず眼前に広がる果てしない荒野を想像してみたまえ
次に、君の足元から地平線に向かって一本の直線を引く
見たまえ、これが世界の全体、そしてそれを分割する分水嶺だ
世界に包括されるすべての因子は
この分水嶺を中心として完全なるバランスを保たねばならない
要するに右と左 これが基本だ
さて、左側には君の所有するもの
右側にはその取得に際して発生した債務を配する
例えば、快樂と生殖、美と毒、
いま生きることといつか死ぬこと
一本の若いけやきと失われた記憶
間違っても、混沌などという概念を持ち込んではいけない
世界はいまこそ秩序を獲得しつつあるのだから
このシステムにそぐわぬものは地平の彼方に追いやりなさい
たとえそれが君自身であったとしても

団欒 (Family Room)

父親は知らない
息子が森のはずれで
北米原住民の儀式のように
厳かにマルボロを吹かしているのを

息子は知らない
妹が洗面台の鏡の前で
蜘蛛に変えられた王女みたいに
もう一時間半も立ち尽くしていることを

妹は知らない
猫のサンチョが車に轢かれて
艶やかな桃色の腸が路上にはみ出したとき

痛みのほかになにを感じていたのか

猫は知らない
庭のトネリコの木が
烈しく葉を降りしきらせながら
屋根の向こうへ遠ざかる雲に託したものを

雲だけが
気づいている
母親の心身の奥底で
少しずつ育ってゆく白い鰐に

母親は知らない
むっつりした自分の顔が
夫の眼にどう映っているのか
夫がそこにどんな預言を読み取っているか

曾祖父の恋文とメンデルと塩鮭の名において
彼らは家族を構成する
骨と羽根の散らばる居間に集い
睦みと諍いで東の間の不死を結界する

復活した猫のサンチョが
爪を研ぎながらそれを見ている

行ってきまあす！ (I'm Leaving)

朝幼稚園へ行った息子が
夜三十五歳になって帰って来た
やあ遅かったなと声をかけると
懐かしそうに壁の鳩時計を見上げながら
大人の声で息子はうんと答えた

今まで何していたのと妻が訊けば
息子は見覚えのある笑顔ではにかんで

結婚して三年子供はなくて仕事は宇宙建築技師
俺もこんな風に自分の人生を要約して語ったっけ
おや、こいつ若しらがだ

自分と同じ年の息子から酒をつがれるのは照れるもので
俺は思わず「お、どうも」とか云ってしまう
妻がしげしげと息子と俺の顔を見比べている
だがそれから息子が三十年後の地上の様子を話し始めると
俺たち夫婦は驚愕する

よくもまあそんな酷い世界で生き延びてきたものだ
環境破壊、人口爆発、核、民族主義にテロリズム
火種は今でもそこいらじゅうに満ち溢れていて
ええっとその今が取り返しのつかぬ過去となった未来が息子たちの今であって
ややっこしいが最悪のシナリオが現実となったことは確かだ

あのう、駄目なのかな、これからパパやママが努力しても？
さあて、どうだろう、時間の不可逆性ってものがあるからねえ
妻は狂言の場面みたいに息子の袖を掴んで
ここに残って暮らすよう涙ながらに説得するが
それはやっぱり摂理に反するだろう

未来はひとえに俺たちの不徳のなすところなのに
息子は妙に寛大だ
既にその世界から俺が消え去っているからだろうか
聞いてみたい気がしないでもないけど
まあどっちでもいいや

「僕らは大丈夫だよ、運が良かったら月面移住の抽選に当たるかもしれないし」
息子はどっこらしよと腰に手をあてて立ち上がり
俺と握手をし妻の頬に外国人のような仕草で口づけをし
それから真夜中の闇を背に玄関で振りかえると
行って来まあすと五歳の声あげた

九月十一日 (September 11)

世間では二年目だのその日から
世界は変わったのと騒いでいるが
ぼくら夫婦にとっては祝うべき記念日

去年まではひと抱えほどのバラの花束が
今年は二本だけ
一本ずつがともに過ごした十年間
花瓶に聳える背の高いツウィンタワー

ヴェジタリアンの妻が作った肉料理に
子供たちはナイフを使いあぐね
彼らの成長を急かしながら
お互いにだけは
時が構わないでいてくれることを夢見る日

交わすべきどんな贈り物があったらろう
寄り添う二本のバラが
音もなく倒壊してゆくこの日々の底で

旅の夏空を封じこめたタルトを頬張り
娘となぞなぞを遊ぶうちに
祈ることも愛することも忘れて
・・・眠った

影のなかの邂逅 (Encounter in the Shadows)

夜眠る前だったか
朝目を醒ました直後だったか
あなたのお母さんに会ってきたわよ
と妻が云った
その時はただ、うん、と応えただけだったが

ぼくは知っていた二十五年も前に死んだ母が
あっちからやってきた訳じゃないと

妻の方から出向いたのだ

夢の野を横切り 死の谷をくだって

臆病なくせに向こう見ずなのは
二十五年前に初めて会ったときのまま
ボタンと閉じる扉の音に飛び上がり
太陽の誘いにやすやすと弄ばれ
たったひとりでも踊ることのできるひと

だが風が止むと死んだように静かだ
閉じた臉の丘の向こうから
妻が歩いてくる
泥だらけで 頬に血を滲ませて
胸の中に珍しい獣のような沈黙を抱えて

風、石を誘う (Wind Seduces Stone)

ねえ、石、
あなたどこから来たの？
あの青空の奥から降ってきたの？
地の底から湧いてきたの？
それとも誰かの上着の
ポケットのなか？

ねえ、石、
いまなに考えてるの？
マンモスに踏んづけられたときのこと？
美しい殉教者の顔めがけて
都の処刑場で投げつけられたこと？
それともひとりだけ生き残る核戦争の翌朝のこと？

いいのよ、無理に答えなくても
誰とでも調子よく話を合わせてばかりの水とか
派手に騒ぎたてるわりには
あっけなく燃え尽きてしまう炎より

無口で孤独な頑なさが
あたしは好き

昨日、あたし、海の上にいる
その前はサバンナ、その前はサハラ
この星のどんな路地裏だって知っているわ
たったひとつ<故郷>という名前の
土地だけを除いてね
自由って案外疲れるものよ

ねえ、石、
あたしといっしょに浮かんでみない？
きっとできるって、ふたりで力をあわせたら
一ミリの百万分の一でいいから
地面から離れてごらん たとえ石でも
総毛立つわよ

坂の上の雲 —— 詩 vs 小説

(A Cloud on Top of the Slope ----Novel vs. Poetry)

1

小説のなかの坂の上で
雲は律儀に一片の雲のふりをしている
小説の外を飛ぶ鳥にとって
雲は雲を超えて
雨であり空であり星の瞬きであり
鳥自身でさえあるのに

人類は未だ物語ることに取り憑かれている
ビッグバン以来流れ続ける銀河に
錆びた言葉の鋏を打ち込み
束の間の主語を擁して
描いては消され 消されてはまた描く
渚の砂の絵

詩は日灼けした少女の素足だ
砂を蹴散らし言葉の貝殻を拾い集めて
眩しげに空に翳す
それからスカートの裾を翻して放り投げる
筋書きも命名も呑みこんで
透明な波動へとほぐす述語の海に

波のなかでは魚の目が
かつて雲だったものの翼を見ている

2

あなたは羽ばたきでした
わたしが蝶を貫く虫ピンだったとき

あなたは指の隙間から零れ落ちる時の砂粒でした
わたしが白い骨だったとき

あなたは虹のきらめきでした、砕け散る波頭にかかった
わたしが自らに座礁した岩礁だったとき

あなたは甘い嘘でした
わたしが苦い本当だったとき

あなたが千夜一夜の波乱万丈を紡ぎだして
星空へ網を広げてゆくとき

わたしは貫く礫です
地中を真っ逆さまにマグマ目指して墜ちてゆきます

魚の変奏 (Fish Variations)

一匹の魚が
深く暗い海の中を

泳いでゆく
ああ、これでもう
思い残すことはなにもない
私は小さく息を吐くと
見渡すかぎりの脱脂綿の野原を
歩き始めた

[子音による変奏]

ippiki no sakana ga
fukaku kurai umi no naka o
oyoide yuku
aa korede mou
omoi nokosu koto wa nani mo nai
watashiwa chiisaku ikio hakuto
miwatasu kagiri no dasshimen no nohara o
aruki hajimeta

*

ぎっしりのバナナが
部落の腐敗と蛆の納屋の
思い出積む
ああ、野辺で萌ゆ
遠い祖国そこは鷺も舞い
案山子が嘶（いなな）く 虹も立つぞ
二ダースばかりの蒸気船のお腹も
楽に入（はい）れた

*

一書記の高田が
無学無頼無知の山を
転んでゆく
ああ、骨出そう
桃色頬腿肌着もない
乾いた耳搔く指揮のタクト
ペガサスマがいの雑種犬のお墓を

狸が見てた

*

忌引の朝方
 愚は云うまい 牛を放そう
 とおどけつつ
 母の目で乞う
 揃いの族の幼い子たち
 可愛や日々は無為に終わるも
 いかなる旅路も大気圏のこなたを
 探り 弥次喜多

[母音による変奏]

ippiki no sakana ga
 fukaku kurai umi no naka o
 oyoide yuku
 aa korede mou
 omoi nokosu koto wa nani mo nai
 watashiwa chiisaku ikio hakuto
 miwatasu kagiri no dasshimen no nohara o
 aruki hajimeta

*

圧迫為すキング
 帆掛け家来倦む七日
 危うい出よか
 おお、こりゃ駄目
 今際（いまわ）のかしこ永久（とわ）に名も無い
 果てし口惜し恋乞うは苦と
 毎年神楽などし民（みん）の名彫り
 色気は止めた

*

切腹情けないが
 火搔き古来雨に泣かん
 異様だ 雪

愛、からだ舞い
 甘い貸方に七万円
 お達者タイ式顔を拭くと
 夫婦（めおと）坂五厘裸足も寧々（ねね）に拾い
 イルカ苛めた

*

いいい お ああああ
 うあうう あいうい おああお
 おおいえ うう
 ああお ええ おう
 おおいお おうお おああいお あい
 ああい あい いたう いいおあう お
 いたあう あいい おあい えお おああお
 あうい あいえあ

コロナ月十首 (10 Tanka of the Corona Moon)

ドアノブに言葉が一粒付着している
 あなたが入ってきたその手で触ったわたしの無言に

生きながら死んでいるのよ
 わたしウィルス晴れのち曇り時々滅亡

わたしのジャイアントパンダとあなたの王様ペンギンが
 横断歩道でワルツを踊る 何気に息を止めて
 私たちがすれ違うとき

街じゅうに落ちている使用済みマスク
 屈んで拾って自分の口に押し付けたくなるのは、愛？

瞬間のひとひらなのね感染（ルビ・うつ）るのも
 その堆積の上で眺める紫陽花

雲という字には魂の欠片があると人は言う
 今日の空は雲でいっぱい

雨を見ていると体の奥が溶けてゆきそう
マダココニイルマダココニイル
雨音だけを後に残して

お願い、数えるのはもう止めて死は唯一つのクラインの壺

石垣、ハチの巣、島宇宙
犇めき合いの隙間からそれ（傍点）はヌッと現れる

「命を守ることが何よりも大切です」
ほんとう？ シロの遺影に
塵の降りつむ

熊野 (Haiku made on the Kumano Ancient Pilgrimage Road)

山に入る

と
山が
自分に
入ってくる

*

岩は空
の軽みに
耐えて

空は岩
の固さを
抱いて

羽搏く
翼

*

こめかみに

汗

葉先に

露

ひと雫に宿る

この春

*

苔に

指

目を瞑る

森が

覚める

*

風

が吹く

騒ぐ

胸の竹林

*

耳の

皴

水の

せせらぎ

心のみずすまし

*

滝尻王子
近露王子
継桜王子
猪鼻王子
発心門王子

千年を経て
なお若い神々に

訊く
老いの行先

*

道に行く
自分

の背中
を見ている

*

人とともに
歩いていても
ひとりの
〈私〉

ひとりで
歩いていると
向こうから
〈君〉

*

坂を
のぼる
息を吸って

坂を
くだる
息を吐いて

重力と
息を合わせる

*

いとこのさきにぶらさがっている蜘蛛
斜めに射しこむ
朝陽

宇宙からの力はまっすぐ

地上は
揺らいで
いる

茸の
ふちの
ぎざぎざ
蟻のてくてく
頭の中のもやもや

*

尾根は
横臥する

女

目で
愛でる
国の柔肌

*

時鳥が
たどたどしく
告げる
今

空に波紋がひろがる

*

熊野本宮

痛！
膝が痛！
石段が痛！
痛！痛！痛！
生きるは痛！死ぬも痛！

痛にしがみつかれて
痛を引きずり

涅槃まで

*

湯に映る
己れの
顔に
月

湯気ゆらゆら

*

新宮

山
と雲
を混ぜて

海

遠ざかる
舟影

なんと
深い
面

*

祈る
形だけ
心を空にして

捨てる
欲も願いも
伽藍堂

神への
投銭

*

那智の滝

崩れ落ちる
時間の
柱

気の矢を放って

仕留める
竜

*

宙
に描く

終わりの
ない
丸

に
浮かぶ
一葉